智慧の念仏

――浄土の経典（九）――

金子大栄

一

『教行信証』を二部に分かてば、教・行・信・証の前四巻は廻向聞思篇であり、真・化の後二巻は摂化帰入篇である。そしてその前篇は『大経』の意であり、後篇は『観経』に依るものである。こうして浄土の経典は領解せられたのであった。

『大経』の上巻は如来浄土の因果を説き、下巻は衆生往生の因果を説く。それは即ち如来浄土の因果は廻向せられて衆生往生の因果となることを顕わすものである。言い換えれば、如来の本願は衆生の聞思によりて成就するということである。

ここには往生浄土の道は、此世の凡聖によりて見開かれるものではなく、ただ浄土の如来によりてのみ開通せられるという事実がある。これを一般的に言えば、相対界より絶対界の道はいかにしても有限界からは付けることはできないということであろう。その道は無限者の自己限定でなくては開けない。それこそ如来の廻向ということであろう。「もしは行、もしは信、一事として阿弥陀如来の清浄願力の廻向成就したまうところにあらざることなし。」しかもそ

れは廻向成就であるから「因無くして他の因あるにあらざる」ものである。それはそこに通路があるからである。

しかし、それは真に信じ難いことである。これに依りて難信の法と説かれた。特に極難信といわれてある。その極難信とは、いかにしても信じられないということである。しかしそれはまた唯信ずるより他ないということであろう。それが仏智不思議と信ずるということである。ここには信じられないという感情に於てのみ信心される境地がある。

それを『経』には「易往而無人」と説かれた。その「易往而無人といふは、易往はゆきやすしとなり、本願力に乗ずれば、本願の実報土に生まるゝことうたがいなければゆきやすきなり。無人といふはひとなしといふ、ひとなしといふは真実信心の人はありがたきゆえに実報土に生まるゝ人まれなりとなり」ということである。仏から開通せられた道にはうたがいがないから易往であり、またそれ故に信心の人はあり難いから無人である。これは畢竟、易往の道理は人間には通じないということであろう。「その国は逆違せず、自然の索くところなり」と説かるる。それは浄土の門は如来の方より開かれているということであろう。しかるに世人薄俗にして不急の事を争う。まことに悲痛すべきことといわねばならない。

この廻向聞思の直道に対して、恰も有限界より無限界への通路を開き得るかの如く説かれたものは摂化帰入の経説である。浄土を願うは人生苦を経験せるものにとりては切実なるものである。したがって、どう思ったらよいか（定善）どうしたらよいか（散善）ということは当然の心であるといってよいのであろう。定善の哲学・散善の道徳を以て宗教を基礎づけようとすることも無理ではないようである。畢竟これ有限界から無限界へと道をつけようとするものである。しかしそれはどうしても不可能であるということに当面すれば、跳躍して無限界に至らねばならない。されどその跳躍は果して可能であろうか。それが可能である為には、かえってその背後に無限の妙用がなければならない。それでなければ、跳躍して無限界を証るといっても、畢竟は有限界に堕するものではないであろうか。

これに依りて摂化帰入の法が説かれることとなった。それは定散二善の要求に応じつつ、それを化して本願の信心

に帰入せしめるものである。そしてその摂化帰入の究極は「ただ念仏せよ」ということの他ないのであろう。念仏なしには定散二善は不用である。それが「観経定散の諸機は極重悪人、唯称弥陀得生極楽」ということであろう。これ即ち『観経』下々品に於て開顕された真実である。しかしその『観経』に説かれた称名念仏は『大経』に於ける聞其名号信心歓喜と一つであろうか。『大経』では「名号を躰とす」といわれ、『観経』では「念仏を宗とす」と領解されている。躰は法の道理であり、宗は機の実際である。したがって名号為躰には本願が宗となりて自力の心の離ることはないが、念仏為宗には願生浄土が機の趣むくところとなっている。それは自身の要求というものではないであろうか。ここには「念仏して自力の心を離れる」ということがある。自力の心を捨てて念仏するといっても、その実際は念仏して自力の心を離れるものであろう。念仏しないものは自力の心を離れることができない。したがって念仏者には必ずそれに依りてのみ自力の心を離れるということが身証されるのであろう。そしてそれに依りて難信の法にも疑いなからしめられるのである。

ここに『観経』の意をついで説かれたる『阿弥陀経』の意がある。執持名号一心不乱なれば、今現在説法の本願の声を聞き、光寿無量の阿弥陀仏の摂取にあづかることともなる。その称名に於て諸仏の証誠護念を感じ、極難信の法にも疑いなからしめらるるのである。

二

法然は往生之業念仏為本と高唱し、親鸞はそれを涅槃真因信心為要と領受した。この両者は対立するものではないことは言うまでもない。信心とは念仏に疑いないことである。ただ念仏する心、それが信心である。しかれば念仏為本なるがゆえに信心為要であり、したがって信心為要は念仏為本に疑いなからしめるものであらねばならない。そしてそれに依りて往生の業も涅槃の因となるのである。若しそうではなく、念仏と信心とは対立するものであれば、そ

の念仏は往生の業とならず、たとえ往生の業と志向しても涅槃の因であることはできぬであろう。したがってその信心もまたその依るところがないものとなる。いかなる宗教も信心為本でないものがないからである。そうして念仏も信心も、自力の行信となりて、他力不思議が感ぜられないこととなるのである。それでは無限界を思慕する宗教というものは全く見失われることとなるのではないであろうか。

されどこれは念仏者にとりては重大問題である。曇鸞は称名念仏すれども無明なおありて所願満たさざることのあることを反省せられた。帰命尽十方無碍光如来という名とそれの表現する義とは、当然破闇満願すべき道理をもつものである。それにも拘らず、それが実際の事実とはならない。何故か。それは「如来はこれ実相身であり、為物身である」ことを知らないからである。その実相身とは阿弥陀仏の自在神力であり、その為物身とは法蔵菩薩の大悲願力であろう。それは要するに、念仏は願力の廻向に依ることを思い知らないものである。「智慧の念仏うることは、法蔵願力のなせるなり」と領受せられないならば、その念仏は真実に人間生活の智慧とはならぬのである。その事実は「信心の智慧なかりせば、いかでか涅槃をさとらまし」ということになるのであろう。しかればその信心は淳・一・相続せねばならないということも、それでなければ念仏成仏ということは成立せぬということであるに違いはない。これに依りて「如実修行相応は、信心一つに定めたり」と領解せられた。これ即ち「ただ念仏」であらしめるもの、それが信心であるということである。したがって念仏者に信不具足のものがあっても、念仏しないものには信心がないことは言を待たぬことであろう。

この事実を信心の方から反省せらるのは善導である。『経』には至誠心・深心・廻向発願心の三心あるものは、必ず浄土に往生すと説かれた。これに依りて善導はその三心を自身に求められたのであるが、どうしても見出すことができない。自己に見出されたものは虚仮不実であって、現に罪悪生死の凡夫である。したがって願生浄土の為には唯だ如来の真実である名号を用いる外なく、深信といっても無疑無慮に大悲の本願を信ずるより他ないのである。これ

に依り廻向発願心ということも真実であり得るのであろう。その廻向発願心に於て、如来の廻向発願心を身証せしめられるのである。

この曇鸞・善導の釈に依りて、直接に『大経』に於ける念仏往生の願意を聞思せられたものが、「信巻」に於ける三心・一心の問答である。しかればその「字訓釈」は、いかにしても衆生心の上に真実の三心を発起し得ぬことを明らかにするために為されたものであろう。しかるにそれは論主に依りて一心と受容せられた。しかれば機受の一心こそ本願三心の廻向であらねばならない。そこに至心の躰を名号とし、欲生心を本願力の廻向として、信楽とはいかにしても衆生心に求めらるべきものではなく、ただ大悲の願心に疑いなきことであることを顕わされたのであった。

その三心釈は永劫久遠の場に於て開陳せられた。「竊かに斯の心を推するに、一切の群生海、無始より已来、今日今時に至るまで穢悪汚染にして清浄の心なし、虚仮諂偽にして真実の心なし。是を以て如来、一切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、一念、一刹那も清浄ならざること無し、真心ならざること無し。如来清浄の真心を以て円融無碍不可思議・不可称・不可説の至徳を成就したまへり、如来の至心を以て諸有の一切煩悩悪業邪智の群生海に廻施したまへり。」これは信楽と欲生とに就いても同様に説き述べられたことである。

しかるに、この永劫久遠の真実が、現生に於て聞其名号信心歓喜として成就する。われらはここに、現生に於ける経験には久遠の事実という根拠があることを忘れてはならぬのであろう。『大経』はその久遠の事実を開説し、『観経』は現在の経験を記述するものである。

三

その『観経』に於ては特に念仏為宗である。そしてその念仏とは称名であって、「観念の念にもあらず、また念の

こころをさとりて申す念でもない」。「ただ往生極楽のためには南無阿弥陀仏と申せば疑ひなく往生するぞと思ひとりて申すほかには別の仔細さふらはず」である。したがって観念の念や念のこころをさとりて申す念は、尊ぶべきものであっても、往生極楽のためにはならない。「もろこしわが朝の智者たち」も念仏を尊重せられた。されどそれらはすべてこの世に於て証りを開くための行であったのではないであろうか。そうとすれば、その念仏は往生を願うても、畢竟は浄土を観想してのものに他ならぬのである。

しからば称名念仏のみが、どうして往生浄土の行となるのであろうか。ここには呼応の道理というものがある。「叩けよ門は開かれん」ということがある。しかし、叩いたということが門を開いたのではない。門は必ず内からのみ開かれるものであって、外からは開かれないものである。しかれば叩いたということは、外からのものの要求であって、開門は内からその要求に答えたものである。ここに呼応という事実がある。称名念仏は、その呼び声である。それに応ずるものは本願の名号である。しかれば南無阿弥陀仏は、その呼び声であることに於て称名であり、その応ずる声であることに於て名号であるといってよいのであろう。

この呼応は言わば約束である。「たもちやすく、となへやすき名号を案じいだしたまひて、この名号をとなへんものをむかへとらんと御約束あることなれば……」とある。その御約束である。即ち誓いである。衆生往生せずばわれも正覚を取らないという約束に於て称名の呼応が成立する。呼と応とは因果関係ではなく約束の道理である。

しかれば宗教は無限と有限との対応であるということも、有限と無限との呼応であるということであろう。したがってその呼応は必然であるといっても、それは有限者に知識されるものではない。ただ「しからしめられる」のである。それこそ、阿弥陀仏のおんはからいに任すということであろう。そこに「ただ念仏」の意味がある。それは「念仏すれば救われる」と予定することができぬということである。何等の予定観念をも交えないところにただ念仏がある。それが「浄土にむまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知

せざるなり」ということである。それこそまた命をかけての念仏というべきものであろう。

『観経』下々品の教説は、正しくこの称名念仏の意味を顕わすものである。応堕悪道の愚人「命終の時に臨んで、善知識の種々に安慰して、妙法を説き、教えて念仏せしむるに遇はん、この人、苦に逼られて念仏するに遑あらず」という。その場合の念仏は観念の念であり、念のこころをさとりての念であろう。臨終の愚人にはその念仏ができない。これに依りて「善友、告げて言く、汝若し念ずること能はずばまさに無量寿仏を称すべし」と勧める。それに応じて「仏名を称すれば念々の中に八十億劫生死の罪を除く。命終の時金蓮華を見る……」と説かれてある。これこそ臨終に死の大暗黒に面して称名するものに実感せられる呼応の事実であろう。「念々に八十億劫の罪を除く」とは、いかにも適切な言葉である。それは大黒暗の彼方に夢(ほの)かに見える光である。無明長夜の灯炬であって真昼の光ではない。されどその夢かに見える光は、無量無辺の彼岸の光である。したがってその夢かに見える光が大黒暗にある衆生を摂化して、無量光明土へと帰入せしめるのであろう。臨終来迎とはそのことであろうか。

ここに「唯だ念仏」という実際がある。しかればそれは本願の約束であるということも、その実際の上に信心されることであろう。その信心なくば「唯だ念仏」というも身につかないに違いはない。されど「唯だ念仏」の実際がなければ、本願を信ずるというも歓喜の心とはならぬであろう。ここに「唯だ念仏」というも、その念仏は称名でなければならない道理があるのである。

「大行とは無碍光如来の名を称するなり」。その「名」と「称」と呼応して、われらの道は開けるのである。これに依りて思うに、『観経』に依りてその「呼」の立場を明らかにせるものは善導の教学であり、その「応」の意義を『大経』に依りて明らかにしたものは曇鸞の解釈である。したがって、通依七祖と偏依法然とは相違するものではない。偏依法然の行信は、通依七祖の教養によりて諸仏称名の普遍の法なることが開顕せられたのである。それは即ち摂化帰入の道に於て廻向聞思が行はれるということである。

四

人生は問いである。われらは問に依りて人生を発見する。したがって未だ問を発さないものには人生はない。人間と生物とを別つものは、問をもっているか、いないかによるのである。

その問とは、先づ以て苦悩の経験であるということができるであろう。不治の病にかかるとか、親しき者に死に別れるとか、動乱の時代に巻き込まれたとか、非常の事実に遭遇したとか、等々が人生の問題となるのである。そしてそれらの問は、それぞれの答を見出すことであろう。多くの教訓はその為に用意せられている。八万の法蔵というも、それぞれの問に即してのそれぞれの答に外ならぬのであろう。されど、それらの答は果して問としての人生に満足を与うるものであろうか。

あらゆる問を通じてその根底に唯一つの問がある。それは人生の意味いかんということである。その問を否応なしに発させるものは「死」である。人生とは、その死の問に答うるものではなくてならない。死は黒闇であるならば、生はその黒闇を破る光を見出さねばならぬのであろう。いかなる応答も、その根本の問に答うることができないとすれば、われらはその根本の問に答うる普遍の光を見出さねばならない。それは問の問に対する答の答ともいうべきものである。

その問の根底にある問、それを宗教的要求という。したがって、その問に答えうるものは宗教的満足である。しかるにその要求を表現するものは南無阿弥陀仏であり、その満足を感知せしめるものも南無阿弥陀仏である。称名念仏する時、要求はそのままに満足となる。これ即ち呼応という事実である。

したがって、この生死の根本に於ける呼応は、やがて人生に於ける種々の問に対しての答ともなるであろう。それは種々の問に対する種々の答は、すべて無意義であるということではない。かえって根本の問と答とによりてのみ

個々の教法も成立するということである。ここに称名は「よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願を満てたまふ」という事実がある。それは死の闇を破り生の光を与うる称名念仏は、あらゆる人生の問題に応答するものとなるということである。その「一切」は「諸」といわれる雑多ではないが、諸を内摂するものである。したがって称名は「諸の善法を摂し、諸の徳本を具ふ」と領解せられる。さればこそ「大行」といわれるのである。

これに依りて称名はまた転悪成徳の正智といわれる。それは問が答となるということである。煩悩を転じて菩提を成すものは念仏の智慧である。畢竟これ人生に煩い悩むことが、その経験に於て人間であることの自覚を得るということであろう。したがって、念仏すれば転悪成徳するということは経験的事実であらねばならない。欲の心の起る時、怒りの情の催す時、念仏すれば、それがいかように転成するかは、実際に経験せられることである。若し煩悩即菩提が論理的のものであれば、それを唱説することは悪無碍となるであろう。氷れば煩悩、溶ければ菩提、そうあらしめるものは称名念仏である。

しかれば智慧の念仏と呼ばれる所以は、特に転成の用あるからであろう。「円融至徳の嘉号は悪を転じて徳を成すの正智」といわれる。ここに仏教で勝義の智慧というものと、世間一般に知識といわれているものとの別がある。その智慧は磨き出されるものであるから、ただ善性であって幸福のみを感ずるものである。これに対して知識は増加されるが、それは善・悪・無記に通ずるものであり、したがって苦もあり楽もあるということである。そこに最も明らかなることは、智慧は転成の用きをもち、知識はただ対治のみを考えるということである。その対治の法は「貪を除きて瞋痴をのぞくこと能はず、あるいは瞋をのぞきて痴貪を除くこと能はず、……ただよく現在の障をのぞきて、過去未来の一切の諸障を除くこと能はざ」るものである。これ即ち対治の知識ではいかにしても副作用あり、逆効果のあることを免れないということであろう。これに対して転成の智慧は、伊蘭林の悪臭を改変して香義ならしめる栴檀の根芽である。これ即ち煩悩の一生を往生浄土の機縁とならしめる称名念仏である。

五

しかるに、この転悪成徳は経験的事実である。その限りに於て、それは唯だ不思議というの他はない。しかしわれらは、どうして念仏にはかかる不思議の事実があるかを問わずにおれぬのであろう。「智慧の念仏うることは、法蔵願力のなせるなり」とは、その問に答うるものである。智慧は普遍の道理を受容し、知識は一般の法則を見出そうとする。念仏は智慧であるならば、その依るところの道理がなくてはならない。称名念仏は本願の約束に依る呼応であると信知せられた。しからば智慧の念仏に転悪成徳の用きあることも、その根本には法蔵の願力があるのであろう。ここには法蔵因位の修行と、今は、念仏者に経験せられる転成の智慧とは、その問と対応するものがあるのではないであろうか。

法蔵の願力は、兆載永劫の場に於ての修行となった。これに対応して、今生に於ける転悪成徳は念仏者の修行となっているのではないであろうか。いかなることも善意に受容し、すべてを此の身の罪障として責任を負う。それが念仏者の一生である。これ即ち人生をこの身の道場とするものではないであろうか。したがってこの事実を推してのみ永劫の場に於ける法蔵因位の修行ということも思い知らしめられる。そしてその法蔵因位の修行なしには、念仏者の一生の転悪成徳は成立しないのである。

これに依りて、念仏者は「欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず……忍力成就して衆苦を計らず……和顔愛語にして意を先にして承問す……」等の経説に頷かしめられる。それはまことに煩悩具足の凡夫の行い得べきことではない。されどその行は煩悩具足の凡夫の世界に於てのものでなくては意味がないのであろう。如来の菩薩としての修行は煩悩生死の衆生界に於てせられたのであった。それが現在の念仏者に廻向表現せられて転悪成徳となるのである。

しかるにこの事実を明らかにする為には、人生もまた永劫の場に於てのみ体験せられるものであることを思い知ら

ねばならぬのであろう。苦悩の経験というも、それは無始已来のものと感知せられてのみ、如来の本願は行信せられるのである。「自身は現に是れ罪悪生死の凡夫」であるということは「曠劫より已来、常に没し、常に流転」せるに依るから、「出離の縁あること無し」である。若しそうでなくて、苦悩の経験は今生だけのことであるならば、それを対治する道もあることであろう。徒らに苦悩の経験を語ることは愚痴でもあり自慢でもあるに過ぎない。それが「久遠劫よりいままで流転せる苦悩の旧里」であり、「無始流転の苦」であると体験せられてのみ、法蔵の願力が身にしみて思い知られるのである。

こうして念仏者は人間の一生に於て、永劫無限の法界に遊履せしめられる。そしてその永劫無限の事実を体験するものとしてのみ、今生の行信は成立するのである。それが「無始流転の苦をすてて、無上涅槃を期すること、如来二種の廻向の、恩徳まことに謝しがたし」ということである。まことに「無始流転の苦をすてて、無上涅槃を期する」ということに於てのみ、「如来二種の廻向」ということも身にしみて感知されることである。

六

ここで私は真宗学の意義を明らかにしておきたい。大聖の真言、大祖の解釈ということがある。その大聖の真言は真宗であり、その大祖の解釈とは真宗学である。したがって、三部の経典を以て浄土正依の経とせられた法然は真宗の開祖であり、七祖の解釈を尊重せられた親鸞は真宗学者であるといってよいのであろう。学者という呼称は「ゆゆしき学匠」という言葉もありて、敬遠されてはいるが、その学匠に対しても「往生の要よくよくきかるべきなり」と勧められてある。しかれば「学問して本願のむねをしるべきなり」ということも、実際の要求ではないであろうか。

しかし、この意味の学問とは、真宗の教を身につけることである。したがって、それは退一歩しての反省に依りて行われるものであろう。しかれば法然に依りて呼応の念仏であった経験を、真実に身につける為に七祖の解釈を尋ね

られた『教行信証』は、正しく『選択集』の師教を退一歩して明らかにせられたものであるに違いはない。その意味に於て親鸞は法然を進一歩するものであるということは、いかにしても親鸞その人の心境ではないといわねばならぬのである。

こうしてわれらは真宗学の名に親しみ、それに依りて、それはそのままに人間学である喜びをもつことができるのである。

七

その真宗学に於て特に原則といってもよいのがある。その第一は如来のあるところに浄土があるのではない。浄土のあるところに如来があるということである。そこに大乗教と浄土教との別があるのであろう。大乗経典に説く浄土は、いかにしても如来あるところ浄土ありということである。しかしそれでは浄土教は成立しない。それでは浄土の彼岸の世界であることが顕わされないからである。これに依りて親鸞の教学は、その彼岸の世界であることを明らかにする為に「浄土あるところ、そこに如来あり」と顕わされた。それが『教行信証』に於ける「真仏土巻」の意であり、また『浄土和讃』に於て、浄土を阿弥陀の名で呼ばれた所以である。

これに依りて第二の原則ともいうべきは、道は自利・利他ではなく、往相・還相であるということである。自利々他は聖者の菩薩道であり、往相・還相は凡夫の救われる法である。そして、その往相・還相は如来の廻向であることに於て自利・利他の徳を具うるものではあるが、自利・利他の行は往相・還相の意味をもつものではない。しかるにその往還二廻向のことは、特に曇鸞に依って説かれたものであった。こうして浄土教を成立せしめるものは二種の廻向である。それは凡夫の呼と如来の応とを転換して、如来の呼、凡夫の応とも思い知らしめるのである。

しかし凡夫は何故に呼ばねばならないのか。それは、人間の業苦は今当面している現世だけのものではなく、無始

已来のものであるからである。ここに第三の原則がある。「自身は現に是れ罪悪生死の凡夫」であるということは、「曠劫已来、常に没し常に流転し」と反省せしめ、「出離の縁あること無し」と深信せしめる。それでなければ「疑いなく慮りなく彼の願力に乗ずる」という心にもなれぬのであろう。このような反省と自覚とは、聖道の修行者にありうるであろうか。それが善導の解釈によりて思い知らしめられたことである。

こうして私は真宗学として依るべき三原則を挙げた。されど問題はいつでも現世のこの身であることは忘れてはならない。この現世の暗を破るものは彼岸の光より外なく、この身の道となるものは往還の廻向である。そしてその光をうけ、その道を身につけしめるものは、人生の業苦の根底となっている無始流転の感知に他ならぬのである。したがって、これを翻がえせば、われらはこの身の一生に於て悠久無限の法界に遊履することになるのであろう。その道は究りなくして、しかも常に手近にあるのである。